

ケニア大変物語

総合人間学部 1 回生 尾崎 純

「国際技術協力」の「国際」と「協力」の2文字に惹かれて受講した月曜1限の講義。まさかこの授業がきっかけではるばるケニアまで行くことになろうとは、今再び考えてみても大変な驚き物語である。「発展途上国」や「国際協力」という、あまりに聞きなれてしまった言葉たち。教科書にも何度も登場し、そのたびに勉強したものの、勉強すればするほど、なぜか自分の中では漠然としたものになっていった。「一度、その実態を自分の目で見てみたい！」と強く思い、今回のスタディーツアーに応募した。

16時間の長旅を終えてエルドレッド空港に着いたのは、9月5日の夜だった。すでに緊張と移動の疲れでくたくたになっていた私たちを、道普請人の喜田さんと松本さんが笑顔で迎えてくれた。マタツの手荒い歓迎(?)を受けつつ、道のガタガタ具合に驚きつつ、無事に事務所に着いた。

翌日は、300 km (?) くらいの(しかもガタガタ、グチョグチョの)道のりを車でひたすら走った。最初に倒れたのは徳留君だった。「うゑ〜う〜う〜」という呻き声が車内にこだました。それを聞いているこちらの方がよっぽど気持ち悪くなりそうだったので、「男なんだから、しっかりしろ！」と喝を入れた私が、今度は車酔いに倒れた。原因は、カルチャーショックのようなものだったと思う。というのも、途中で立ち寄った食堂のトイレが、人生初ぼつとんであり、その衝撃は大きかった。また、そこでケンタッキーフライドチキンを食べている時に、喜田さんが「おお〜、これはよう庭先で走り回ったチキンやな！」と言ったのだ。おもむろに庭先に目をやると、なんと本当に未来のチキン予備軍たちが走り回っていたのだ！「そうか、これは、あれなのか…(わかりにくくてすみません。)」と思って気が滅入った瞬間、一気にバクテリアが私の体内に侵攻したのだろう。事務所に帰ってきてきて熱を測ると、39度もあり、途方もない寒気と吐き気に襲われた。

翌日に行った私立病院でも大変物語は続いた。想像していたよりきれいな院内に安心したのもつかの間、私を待っていたのは注射の嵐であった。とくに血液検査後の注射が強烈だった。今にも死にそうな面持ちでベッドに横たわっていた私のもとに運ばれてきた注射は、ソーセージのように太い注射であった。しかも2本も、だ！拒む暇もなく、針は容赦なく私の血管に入っていった。日本と違い、手首の血管に10cmほど針を入れるのだ。当然、血が逆流して吹き出す。傍らで見ている普段は冷静な松本さんも顔をしかめるほどのグロテスクな光景だった。しかし、看護婦さんの口から出てきた言葉は「ポ〜レ、ポ〜レ (slowly, slowly)」。開いた口が塞がらなかったけれど、アフリカンマインドを実感できたよい経験だった。実際、その効果はテキメンで、1日で35度まで熱が下がった。予想外なケニアの医療事情を知ることができた1日だった。同時に、日本の医療技術の素晴らしさも改めて感じた。

次に私を待ち受けていた大変物語は、ヴィレッジステイだった。1つの村に日本人が1人だけなので、頼る人はもういない。おまけにどこからともなくやってくる子供の大群に襲われる毎日。

食事も慣れていないため、ウガリもスクマも好きになれなかった。寝る時も、隣には砲丸投げの選手のように大きい女性が寝ていた。だから、最初は時間が過ぎるのがとても遅く感じた。けれど、いちいち日本の生活と比較して驚くことがなくなり、ケニアではケニアの暮らしを楽しめるようになると、慣れないことの一つ一つをととても愛しく思うようになった。郷に入れば郷に従え、だ。

ヴィレッジステイと並行して、道直しの活動をした。最初は、私たちが率先してやらなくては、と思っていたが、やってみるとびっくり物語。ケニアの人たちは、我々が行っている道直しの方法を熟知していて、私たちがいなくてもしっかりと道が完成するように思えた。

改めて、「技術を現地に根付かせる」ことの大切さを感じた。もっともっと広くこの活動がアフリカ中に広まればいいのになあと思った。

そして、最後の5日間はマトマイニで生活した。マトマイニは、「孤児院」と聞いて想像していたイメージとは全く異なる場所だった。そこには孤児だけが生活している訳ではない。マトマイニには工房があり、そこで日中は母親たちがお土産用のフェルトのぬいぐるみやアクセサリーを作っている。それだけではない。マトマイニは緑が多く、森のようだ。その森の中では、ニラや春菊といった日本野菜やグアバなどの果実がたくさ栽培されている。それらを収穫し、顧客に売って生計を立てる。もちろん、畑で取れた野菜は昼食や夕食の食卓にも並ぶ。一つの孤児院の中で、一つの社会が動いていることに驚いた。

マトマイニでの生活の中でも多くのことを学んだ。お風呂で使えるお湯は、桶1杯のみ。自分が普段どれだけ無意識に水を使っているのかを知った。また、恥ずかしながら、私はケニアに来るまで自分の洗濯物を自分の手で洗う、という経験があまりなかった。1つの衣類を洗うだけでこんなにも大量のヘドロが出るのか、と驚いた。食事は、自分たちで野菜を収穫し、薪を炊いて作った。みんなで収穫して泥を取り、調理して作った食事は、最高に贅沢なものだった。

今まで生きてきた中でこんなに自然の大きさや優しさを感じたことはなかった。マトマイニの人たちはみんな、自然を労わって生きていた。

マトマイニにいる間に、スラムにも行った。ケニア最大のキベラスラム。「キベラ」とは、「森」という意味らしいが、行ってみると「キベラ」の面影はなく、どんどんスラムが広がっている様子だった。スラムといっても、想像とは大きく異なるものだった。スラムの中でも様々な商売をやっているし、保育所のようなところもあった。そして、とても活気があった。笑顔に溢れていた。不思議な光景だった。

たった16日間ではあったが、実際に行き、自分の目で見ることでたくさんのことを学んだ。現地で見ることではわからないことはたくさんあると思った。日本にいるときに想像していたものとは大きく異なる現状を、目に焼き付けた。また、今回「学生ボランティア」という名目の私たちが助けられることの方が多かった。改めて、ボランティアとは、「チャリティー」などという一方的なものではなく、双方向性のあるものなのだと実感した。平等な同じ地球上に、富む国と富まざる国が存在するという不平等。しかし、人の生に優劣はないのだということを改めて感じた。価値観の違いはあるけれど、人を愛する気持ち、自然を愛おしむ気持ち、平安を願う気持ちなど、国境を越え、人種を越え、誰もが抱く感情もまた存在するということを感じた。そういう人間的に通じ合う感情を大切にしながら、人間であれ自然であれ、天秤に

かけられない「生」を労わることを何よりも大事にして、「チャリティー」ではない「ボランティア」の形をつくっていただけたいと思った。

●以下↓ Photo of KENYA



→これは、マトマイニで仲良くしていた女の子たちと撮った写真です。前列の3人が左から長女、3女、次女の3姉妹で、後列左がダイアナという14歳の女の子です。それぞれの事情は違いますが、みんなが夢を叶え、お互いに幸せな人生を送っていただけたらそれ以上のことはないと思います。



→私が日本からお土産で持って行った縄跳びが大人気。ケニアの子供たちは本当に遊びの天才で、一つの道具から10パターン以上の遊びを考案してくれるので、見ているこちらの方も楽しくなりました。写真は、ヴィレッジステイの時のホストファミリー、サルマちゃん。



→マトマイニのフェルト工房で働いているお母さん、モニカのベビー。いつもまっすぐな目で私たちを見つめてきます。大きくて澄んだその瞳の先に、平和な未来は映っているでしょうか。子供は希望であると感じる今日この頃です。



→ジャジャー！道普請人のシンボルマーク。このマークからは、「単なるボランティアではない。あくまでも現地の人に技術を根付かせることによって、道を整備し、貧困の解決につなげるんだ！」という強い草の根魂が感じられます。



ケニアの道の上で様々な経験をした。車酔いに倒れたケリオビューまでの道のり。初めての土嚢による道直し。ホストファミリーと歩いた道。改めて、道は人と人をつなぐことを実感した。道の整備は、新たな人間関係の構築でもあると思う。貧困解決にもつながる。色々な意味で、道直しは「世直し」であると考えた今日この頃。 End